



日本 戦闘者



荒谷卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>

040

特殊戦群の部隊章も自分たちで考案した。骸骨とかサソリのようなゲテモノの絵柄はまっぴらだ。日本の歴史伝統に基づくものでなくてはならない。そこで、まずは日本の中心である皇祖皇宗を顕す「御日様（アマテラスオオミカミ）」を真ん中に置くことにした。次に、日本の武をあらわすタケミカヅチノ神の剣「御霊（フツノミタマ）」を正中に立てた。次に、神武天皇東征の折に勝利へと導いた「金鷄（キンシ）」を中央下に描いた。次に、身を捨て心を生かす日本の戦闘者の死生観を現すために「桜（サクラ）」を剣の柄に記した。そして最後は、日本の戦闘者の魂の依代として「榊（サカキ）」を左右に囲った。こうしてできたのが「特殊戦群の部隊章」である。

この部隊章を身につける以上、相應の覚悟が必要だ。実際に、特戦群の隊員は、この部隊章に恥じることはない。凄いやつらだったよ。

部隊発足と同時に、「イラクにおける人道復興支援活動及び安全確保支援活動の実施に関する特別措置法」に基づいて、2004年以降、イラク派遣された陸上自衛隊の部隊の安全確保のために、特戦群のチームも派遣された。本隊とは別に、俺の他に見送りもない空港で、混乱の続くイラク南部の町サマーワに出発する4名の特殊部隊戦士を見送った。心が定まった様子で、肩の力が抜け、ことも無さげにイラクへと歩みだした。彼らの雄々しい後姿を忘れることはできないよ。やつらの任務は要人警護、部隊警備を主とするも、イラクでの人道復興支援活動の目的を達成するため



に必要なあらゆることをしなくてはならない。出発までには、一般的な軍事訓練をはるかに超えた特殊戦技能を磨いた。それは、単に近接戦闘射撃、情報活動、救急救命、緊急事態対処等に留まらず、現地の人たちとの心の交流ができるようにアラビア語を学び、コーランを学習した。しかし、最も重要なのは、イラクの地で日本人の真価を発揮できるよう、武士道精神を身につけて出発したということだ。彼らの任務遂行手段は、武器に頼らず、日本人としての真心だったな。

第1次派遣隊が、サマーワ・ベースを開設して間もなく、まだ未完成のベースに対して迫撃砲による攻撃があった。この時の俺に対する特戦群派遣隊員の一報は、「群長。この時を待ってました。ようやく自衛隊に入った甲斐がありましたよ。では、いってきます」。彼らは弾の下で行動できることを嬉々として伝えてきたもんだ。

彼らのリーダーは、サマーワの人々から「サオディー（幸福）」と呼ばれるようになった。「お前にはイラク人の血が入っているはずだ」といわれる程に、彼らは現地の人々に溶け込んだ。青森出身の彼には夷の血が流れているのか、少々毛深いので、確かによく見るとイラク人にも見える。そして、彼らは帰国間際に連絡してきてこういった。「群長。俺らこのまま残留してイラク復興のための活動を続けたいですが、どうですかね」と連絡してきた。これほどまでに現地の人々から信頼され、自分達もまた真心で現地の人々の幸福のために行動する。他の国の軍隊にはありえない話だよ。俺も、彼らの気持ちをかなえさせてやりたい思いは強かったが、政府の命令で言っている以上そうもいかない。「そうか。ま、とりあえず一回帰って来いよ」と返事をした。

部隊章デザインの由来は、①日の丸：天照大御神（アマテラスオオミカミ）から。日の丸は「正統性」も意味する。②剣：鹿島神宮の御祭神「建御雷神（タケミカヅチノカミ）」の剣から「勇気と知恵」を表す。③トビ：神武天皇が金のトビに助けられて戦いに勝ったという神武東征の話から「勝利のシンボル」。④桜：「信義」を表す。⑤神籬（ひもろぎ）：神の宿る木「神聖で不変」を意味する。写真は楯。

その中の一人は、帰国してすぐ癌を宣告された。レベル4だった。彼は死ぬまでイラクでの任務復帰を強く要望していた。痩せこけてミイラのようになっても仕事を続け、任務に就かせてくれと言いつけていた。彼が死んだときは、彼の願い通り、同僚隊員らが彼の棺桶を担いで駐屯地を巡り全員で魂を送ってやった。

また、別のチームで派遣されていた特戦群の隊員は、派遣間に奥さんが亡くなるという不幸に遭遇した。彼は、奥さんの葬儀のために帰国した。俺は彼に「代わりの隊員を派遣するから、お前はそのまま残った方がいいんじゃないか」ときいた。すると彼は、「群長。俺は任務遂行中です。途中で任務を放棄するわけにはいきません。そんなことをしたら死んだ妻に申し訳ない。身の回りのこと諸々片づけたら、できるだけ早くイラクでの任務に戻ります。チームのやつらが待ってます」と言って、イラクに戻っていった。

どんなに頭がよくても、技術に長けて体力があろうが、この精神がなくては戦闘者としては話にならない。それは、個人だけの問題ではなく、家族全員が、この精神を尊重しているということが大事だ。マイホームパパや嫁の顔をうかがうようなやつは戦闘者には向かない。

俺は、イラク派遣前の隊員とは、しこたま飲んで語り合った。そして彼らに言ったのは、「今回の作戦は現地の人達の人心を獲得することが大事だぞ。それは、派遣部隊の安全を確保するための要件だ。しかし、それだけではないんだ。日本人の真心でイラクの人々を感化し、日本の歴史・文化・伝統の中にある社会秩序と人倫道徳を実践して見せる。そうして、彼らが幸せで豊かな国家・社会をつくる手掛

自衛隊イラク派遣（2003年～2009年）において、2004年から特戦群は参加した。写真はイラクの古代都市ウルの遺跡ジグurat。王家の墓でピラミッドのようなものだ。写真中央が筆者

かりが日本にあるということを示すんだ。それが、日本の戦闘者としてのお前らの任務だよ」「そのためにはな、米軍から教わったように、IEDのテロなどを食らった時に、真っ先にその場から逃げて、その後そこら中の怪しいやつ等をぶち殺すようなことをしては絶対にダメだぜ。IEDを食らったら、先ずはその場にいた現地の人々に声をかけろ。『皆さん、大丈夫でしたか。怪我はありませんか』とな。そして、もしけが人がいたら、すぐに救命や手当をしろ。その後、仲間の救命と手当だ。仲間が死んでもうろたえるな。きれいに現場を片付けて、『皆さん気を付けてください』といって肅々とその場を立ち去れ。そうすれば、現地の人々はお前らの味方になる。テロリストも再び襲うことはしない」「まあ、お前らだったら大丈夫だ。たのんだけ。イラクと日本を」。

酒を飲みながらも、決して乱れることの無い彼らは、俺の話に静かに聞きながら頷いていた。彼らからは、決断の気概が漂っていた。決心は、物事を決めるだけだから容易である。決断は重い。断つことを決めるのだ。いろいろな情念、欲望、人間関係、特に家族のこと、そして自分の命。これらすべてを断って全身全霊で任務行動に当たるのだ。

かといって、悲壮な思いでそこに向

かうわけではない。すっきりと晴れ晴れした気持ちであり、力がフツフツとわいてくる感覚だ。今どきの映画やドラマは、戦争や特攻といえば、重苦しい悲壮感漂う情景の中で涙を流しながら戦闘に向かう兵士の姿を描く様なものばかりだ。反吐が出る。日本の戦闘者を馬鹿にするのは止めろ。そんな女々しい生き物じゃないんだ。日本の戦闘者は、戦って日本を守るために生まれてきたんだ。先人に恥じない生きざま死にぞまだけを考えて生きているんだ。身を守るために自分の本心を裏切り、心を殺し、思いを断念して生きるような見苦しいことはしない。心を生かし身体を使い切る。思いを貫き本心で生きる。大丈夫の気概こそが日本の戦闘者の生き方だ。

俺は、こういうやつらとともに特戦群を立ち上げ、共に訓練し、任務遂行にあった。最高に幸せな時間と空間だったよ。

こまごましたことは、秘密保全上言えないので、特戦群のことはこのへんにしとく。この記事を読んでいる人が考える以上に特戦群というのはけた外れにすごい部隊だよ。そういうやつらが、まだこの日本にいるんだから安心してくれ。あいつらは必ずやってくれる。そして何より、俺はまだ日本の戦闘者として現役だからな。日本は大丈夫だよ。



041